

＜私たちの一人娘、花菜＞

2012年9月13日

作成：西野 光美

私たちの娘、花菜は、出産予定日より2カ月早い平成9年9月26日に2204gの低体重児で生まれ、その後順調に育ってくれました。

母親の私は神経系の難病をいくつも抱え、入退院を繰り返しています。しかし花菜は泣いて困らせたりすることは一度もなく、いつも明るく振舞ってくれました。3歳で一人両親から離れ、三重の鈴鹿の祖母に預けられた時も、決して「パパ、ママに会いたい」と困らせず、祖母の店のお客さんに、「ママどうした？」と聞かれると、「病院にいるの」と、店の手伝いをしながら明るく答えていたそうです。その入院前に、私が視神経の炎症で目が見えなくなって一人泣いていると、静かに遊んでくれるのですが、そっとティッシュを置いてくれた、優しい娘でした。

小学生になると通院、入院時に介助してくれるようになりました。私が脊髄神経の管が破れて、下半身がしびれたり、足が動かなくなったりすると、病院の車椅子を取って来て押してくれました。目が見えない時は病院のさまざまな書類の難しい字を楽しそうに読み上げてくれました。その明るさがどんなに、私の救いになったことかわかりません。

そんな生活の中でも、決してふさぎ込まずに嫌がらずに、変りなく振舞ってくれて、母親の私を手助けしてくれました。本当に花菜に救われていました。感謝しています。

その時々で、たくさんの素晴らしい花菜との思い出があります。

2歳の時、私の図面の仕事仲間と、遠く山梨までのサクランボ狩りバス日帰りツアーに二人で行った時、「ママは抱っこして歩けないから、最後までバスの中でも泣かず、歩いてね。」と言うと、お友達が両親に抱っこしてもらっているのをみても、一生懸命最後まで歩いてくれました。帰宅した玄関で、私が座って「偉かったね。」と涙一杯で抱きしめた時の得意そうな姿も忘れられません。

通院に付き添ってもらった帰りは、二人で入るちょっと大人のおしゃれなオムライス屋さんのランチが好きでした。もちろんドリンクバーやサラダバーは私の分も取って来てくれます。食事の献立にも文句も言わず、いつも全部食べてくれ、好きなカレーや、パウンドケーキ、クッキーを焼いておくと、小学校から帰宅し「やったー」と喜んでくれます。餃子やケーキ、クッキー作りも好きでした。

そろそろお年頃ということもあり、おしゃれするのも大好きでした。上手に自分のもっている服を組み合わせ、「これ買って」とはねだらず、ジャスコやしまむらに行く時は買ってもらえるかも・・・の期待で必ずついてきたものです。

物を大事にする子で、幼稚園入学時に作ってあげたお箸袋は小学校卒業するまで9年間使用し、小学校入学時に、私の友人からもらったお手製の大きくのばせる靴袋は、野外活動のかばんの中に中学の靴と一緒に入れてありました。

私の体が不自由なため、2階より上の階段や体育館の階段が上がれず、小学校高学年の授業参観、体育館での音楽部の演奏発表や中学の入学式を観てやれず、多くの不憫な思いをさせました。父親が休みを取って参観することもありましたが、決して辛いとは口にせず、たった一人で頑張ってくれました。

また小学校生活では、たくさんの賞をもらう事ができました。特に理科の「自由研究」では、提出すれば必ず豊橋市から優秀賞を頂きました。学校では国語や算数のコンクールでの「満点賞」が当たり前で、その時期がくると一生懸命に取り組んでいたのも、その結果だと思えます。

中学になると部活動は吹奏楽部に入りました。ホルンを担当しましたが、家に帰ると、腹筋や腕立て伏せを150回頑張っていました。ホルンを吹くためには、腕やお腹を鍛えなければならないそうで、先輩や先生に言われたことは絶対でどんなに忙しい日でも毎日欠かさず、野外活動に行く前日まで実施していました。

また必ず毎週3人で買い物に行きました。私たちの休みの日の幸せな時間帯でした。そして何よりも、いつも笑いの絶えない家庭でした。

そんな中、自分の我を出したのが、ピアノとバイオリンを続けられないかもしれない時でした。私の再発が重なり、視神経の炎症で目が見えなくなったり、脊髄の神経が破れて足が動かなくなったり、車で送り迎えのピアノとバイオリンを辞めると言うのと、下を向いて小さな声で「続けたい・・・」と、涙を流して言ったのが忘れられません。

小学1年生でピアノを、2年生でバイオリンを習い、4年生で能楽子供教室、小学校の音楽部はトランペット、ホルネット、中学の吹奏楽部ではホルンをと、父親譲りの音楽好きで張り切っていました。野外活動で出かける前日の夜も、バイオリンとピアノのレッスンを受けていました。

学校の野外活動に行く6月17日の朝は、父親が出張でいず、私の布団の上げ降ろしもしていってくれました。私は一人で花菜を送り出さねばならず、忘れ物をさせないよう、お弁当が傷まないよう必死で、笑顔の余裕もなく心の中で「無事帰ってくれますように」「楽しんでくれますように」と。「行ってきます」と、迎えに来てくれたお友達の車に笑顔で乗り込んだのが最後の姿です。

家でも怒ったこと、お友達の悪口を言ったことのない優しい娘で、いつもまわりの友達のことを考えていました。おそろおそろ私達二人でみた、命を落とす前夜の研修会のしおりに書かれた「将来の夢」は、花菜の好きな音楽の道ではなく、『人を助ける医者になりたい』、『友達の活躍を見てみたい』でした。

私達は、最後まで娘の優しさに包まれていました。

一人娘の花菜は私たちにとって、いのちよりも大事な存在でした。